

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

首里王朝の言語(2) 人間関係の性・年令・親疎等を 基準とする語彙

著者	中本 正智
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	5
ページ	117-151
発行年	1979-10-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/12082

—首里王朝の言語(2)—

人間関係の性・年令・親疎等を基準とする語彙

中 本 正 智

目 次

1. 人間関係を表わす基準
2. 総称としての「ひと」(人)
3. 性別 —— 「男」と「女」
4. 年令差(絶対的) —— 「おとな」「としより」「若者」「子供」「赤坊」
5. 年令差(相対的) —— 「年上」「同年」「年下」
6. 親疎 —— 「友」

1 人間関係を表わす基準

「人間関係」を表わす基準をどうとるか。それにはいろいろなとり方がある。たとえば「性」を基準にとると、人間の総称である「ひと」は、

ひ と (人)	{	おとこ(男) おんな(女)
---------	---	------------------

のように分かれる。この語は単に性別の意味を表わすばかりでなく、ある特別の関係にある男や女を指すように意味がひろがることもある。これが語の意味の普通のすがたであろう。

「年令」を基準にとると「ひと」はどのように分かれるか。それには絶対的なとらえ方と相対的なとらえ方がある。絶対的なとらえ方をすると、

ひ と (人)	{	お と な(大人)	{	としより(年寄)
		こ ど も(子供)		わかもの(若者)
		あかんぼう(赤坊)		

のように分かれる。これらの語は人間の成長過程に応じて呼び分けられるもので、対比される相手との関係で呼び方が異なるものではない。これらの語は、単に年令を表わすだけでなく、「おとな」ならば「思慮分別がある人」の意に比喩的に用いられることもある。一方、相対的なとらえ方をすると、

ひ と (人)	{	と しょう え (年上)
		お ない ど し (同い年)
		と し し た (年下)

のように分かれる。これは対比される相手に応じて、「と しょう え」になったり「と し し た」になったりして呼び方が相対的に変化する。

「親疎」を基準にとると、

ひ と (人)	{	と も だ ち (友達)
		し ん せ き (親戚)
		た に ん (他人)

のように分かれる。総称の「ひと」は、単に総称に用いられるばかりでなく、「他人」の意にも用いられる。

「職業」を基準にとると、

ひ と (人)	{	り ょう し (漁師)
		の う ぎ ょ う (農業)
		だ い く (大工)
		げ っ き ゅ う と り (サラリーマン)

のように分かれる。これらの語は社会の変化に応じてとりかえられていく。

沖縄では漁師はウミンチュウ（海の人）またはウミアッチャー（海を歩く人）といい、農業をする人をハルンチュウ（畑の人）またはハルアッチャー（畑を歩く人）という。沖縄ではアッチュン「～する・働く・通う」などさまざまな意味に用法がひろがっている。

「地域」を基準にとると、

ひ と (人)	{	に ほん じん (日本人)
		ほ ん ど の ひ と (本土の人)
		と う き ょ う の ひ と (東京の人)
		お き な わ の ひ と (沖縄の人)
		し ま の ひ と (島の人)

のように分かれる。観点のちがいによっていろいろな呼び方ができる。

ひところ、沖縄の人が「本土」を呼ぶのに「日本」といい、「本土の人」を呼ぶのに「日本人」という呼び方をするので、まるで外国人の観点に立った呼び方であるとして批判の声が強かった。日本復帰を境に「本土の人」という呼び方に落ち着いたようである。これまで沖縄の人が「本土」を「日本」と呼んできたのは、大和時代からの伝統的な呼び名である「大和」の直訳的な表現であった。けして外国人としての観点を意識して呼んでいたわけではない。かならずしも批判は正当ではなかった。本土から沖縄を呼ぶには「沖縄の人」は普通であるが、「沖縄人」というと何となく蔑称のひびきがともなうのも不思議である。

属島から本島を呼ぶ時には、属島と本島とのちがいははっきりと意識して呼ぶのが自然であり、

事実、そのような呼び方が基本をなしている。宮古・八重山から沖縄本土を呼ぶのに、これらの地域が沖縄県であるにもかかわらず、ウキナー（沖縄）を用いる。きわめて自然だ。沖縄の属島である津堅島から沖縄本島を呼ぶのにウフジ（大地）という。これも興味深い呼び方である。特に変わっているのは奄美大島とその属島を含む奄美地域から沖縄本島をナハと呼ぶことである。「沖縄へ行く」はナハ カチ イキュン（ナハへ行く）のようにいう。これは沖縄の文化・政治の中心都市「那覇」が沖縄の汎称に用いられるようになったものであろう。離島はハナレと呼ぶのが一般的。

このような呼び方は本土においても例外ではない。行政的に東京都に含まれている伊豆七島のはずれに位置する八丈島では、東京および本土のことをクニ（国）と呼ぶ。「東京へ行く」はクニ シャン イクという。八丈島の人達は、八丈島のことを単にシマと呼び、本土との関係を、シマ対クニでとらえている。

日本列島は琉球列島を含めて多くの島々からなっているが、島と島との関係をどのように呼び分けているかということは、日本人の自己認識にかかわる重要な問題となるように思われる。

琉球全域でシマ（島）は単に島嶼の意ばかりでなく、生まれ故郷および住みなれた集落を表わすことはよく知られている事実である。ワッターシマ（私の故郷・集落）、シマンチュ（島の人、自分が属している集落の人）、チュシマンチュ（一島の人、自分の属している集落の全構成員）、ウミジマ（海島、漁村のこと）、アギジマ（陸島、農村のこと）など、多くの派生語がある。

人間関係を表わす基準はこれだけではない。出生時の事情を基準にとると、「ふたご」（双生児）、「しせいじ」（私生児）、「みなしご」（孤児）などの呼び分けをすることもできる。「としより」（年寄）に対する「わかもの」（若者）は、さらに「性」によって「せいねん」（青年）または「にさい」（二才、ニンサー）、「むすめ」（娘）などの呼び分けもできる。

沖縄では戦後のしばらくの間、男子青年をセイネン、女子青年をショジョ（処女）と呼んでいた。

人間関係を表わす基準のうち、語彙のもっとも明確な大きなグループを形成する基準は「親族」である。一般に「親族」に関する語の集まりを「親族語彙」と呼んでいる。もっとも体系的な構造を示す語彙の一つである。

以上は人間関係を表わす語彙を設定する基準の例である。これらの中から特徴的なものを取りあげて首里方言を中心とする琉球方言のすがたを考えてみよう。

2 総称としての「ひと」（人）

現代首里方言では「ひと」を表わす語は、

ツチュ tʃu

である。語頭の促音があって、フィチュの語頭音の脱落を思わせる形で、*pito **pitō にさかのぼる。この語は「ひと」の総称のほかに、「他人」の意を表わす場合も多い。

ツチュ ヌ ムン （他人のもの）

ツチュ ビレー （他人との交際）

ツチュ マサイ (他人よりまさること)

この *pito にさかのぼる語は、琉球の主な方言でどのようなすがたになっているか。以下、分布図を見ながら概観しよう。奄美と沖縄は北琉球、宮古と八重山は南琉球と呼ぶ。

もっとも古いすがたは南琉球に残っていて、宮古島や八重山の多くの地域で pītu である。この形から第一音節の中舌母音がなくなって西表島租納では pītu, 石垣島大浜では putu となる。さらに第二音節の t が摩擦音化して黒島や鳩間島で pīsu または pusu となる。北琉球では第一音節の pi をとどめるのは奄美の与論島だけである。

第一音節の pi が çī に変化しているのは北琉球では久米島の島島、南琉球では宮古の池間でみられる。この形から第一音節の çī が脱落して tu または tu: となるのは北琉球では沖縄北部の奥・辺野喜, t^ʔu: となるのは南琉球の与那国である。

t^ʔu(:) および tʃu(:) は、北琉球全域の優勢語形である。これは第二音節の tu が第一音節の狭母音 i の影響で口蓋化および破擦音化して tʃu になり、ついに第一音節も脱落してできた形である。このような分布のすがたは十四、五世紀頃の首里王朝の言語でさかんに起こっている口蓋化現象が周辺の諸方言へ浸透していった結果とみることができる。首里王朝の言語でさかんに起こった口蓋化現象が北琉球だけに限られ、南琉球までひろがっていないのは、首里王朝の支配構造とかかわる重要な現象とみなければならない。

北琉球ではハ行 p 音をとどめる地域においても、「ひと」では p 音をいちはやく失っている。たとえば沖縄北部の名護では「火」は p^ʔi: であるのに、「人」は tʃu: である。これは同じ子音であっても、p 音を失う速度が語により、あるいは音環境により異なっていることを示している。名護では「火」と「人」が、

火 *pi: → p^ʔi:

人 *pito → pītu → pītʃu → tʃu → tʃu:

のような変化過程をふんだことを示している。おそらく、首里では

火 *pi: → φi: → çi:

人 *pito → pītu → φītu → φītʃu → tʃu

のような変化過程をふんだであろう。

「肘」なども「火」と同様な段階にあって「人」より変化がおくれている。たとえば、奄美大島佐仁・喜界島志戸桶・与論島・沖縄北部名護では pidçi で、語頭音 pi をとどめている。この差は「肘」と「人」の分布図に表われている。

文献ではどのような形があるか。『おもろさうし』では、「ひと」は漢字による表記「人」もあるが、ひらがな表記もあって、

おい人 とゑは ひとのおやに とへは (五一二六八)

のように「ひとのおや」(人の親)が現われる。さらに『おもしろさうし』には、

たけの わかいへきよ (嶽の若い人) (十三一八七五)

のように「へきよ」も現われる。ただし、この例は人名の中で現われている。

音韻的に並行している例をあげれば、現代首里方言でチュイ tʃui になっている語も、『おもろさうし』では、

「なこのうら たゝひとり やたもの

「おもいはの きもちやさ (十四一九九七)

のように「ひとり」(一人)で現われている。いまひとつ「語音翻訳」の「人」の語例は諺文で記したものであるが、当時の首里方言の pitʃu か pitʃu の変化段階を記したものと考えられる。

以上のことから、十五、六世紀の首里では「ひと」は第一音節をとどめたところの、

$\text{pitʃu} \rightarrow \text{pitʃu}$

の変化過程にあったことがわかる。そして現代までの五・六百年のうちに、奄美・沖縄のほとんどの方言で第一音節が脱落して tʃu に変わったことがよみとれるのである。

奄美・沖縄の北琉球でさかんに起こった第一音節の脱落現象は、おそらくこのような時期に並行して起こったことであろう。同類の変化の起こった語例をあげると、

ティーチ ti:tʃi (一つ), チュイングワ tʃui ggwa (独り子), チュイ tʃui (一人)

ターチ ta:tʃi (二つ), タイ tai (二人), ターチュー ta:tʃu: (双生児)

などである。

3 性別 — 「男」と「女」

現代首里方言では「男」と「女」はそれぞれキキガ wikiga , キナグ winagu という。これは一見して東京のオトコ otoko , オンナ onna とは別語であることが予想される。

東京のオトコとオンナは、それぞれ歴史的に上代語の「をとこ」と「をみな」にさかのぼる。ところが、この一対の語は、古くから一対の語としてあったものでなく、それぞれ別の対をなす語から流れこんできたものである。つまり「をとこ」は「をとめ」(処女)と対をなし、同根の「をとこ」は「若く生命力のあふれた」様子を表わす語で、接尾の「-こ」は「子」で男性を、「-め」は「女」で女性を表わし、「をとこ」「をとめ」はそれぞれ「若い男性」「若い女性」を表わす語であった。この対から「をとこ」だけが「若い」という限定をはなれて年令と関係なく男性全体を表わす語へと発展していったのである。

一方、「をみな」は年令差を基準とする語で、「おみな」(嫗)と対をなしていた。頭音の「を」が「年少」を表わし、「お」は「おほ」(大)に通じて「年長」を表わしていた。「み」は共通に「女性」を表わす語であった。「おみな」はあとで「おうな」に変化していく。男性の方も「をぐな」(童男)と「おきな」(翁)が年少と年長の対を表わしていた。

このように本来、「をとこ」と「をとめ」は「若さ」を基準とする対の語、「おみな」と「をみな」——女性——, 「おきな」と「をぐな」——男性—— はそれぞれ対をなして年令差を基準とする対の語であった。前者の「をとこ」と後者の「をみな」が駆け落ちよろしく、新しく対をなして性別を表わすものとして発展してきたのが現代東京のオトコとオンナである。

首里のキキガとキナグはどのような語か。まず琉球では「男」と「女」をどのような語で表わしているか。主な地域の方言形をながめてみよう。

奄美大島浦上・湯湾	jigga	(男)	wunagu	(女)
喜界島志戸桶	jiŋga		wunagu	
徳之島井之川	jiŋga		wunagu:	
沖永良部島田皆	jiŋga:		wunagu:	
与論島麦屋	wuiga		wunagu	
沖縄奥武	jikiga		jinagu	
宮古大神	bikiɖum		miɖum	
八重山川平	bigidun		mi:dun	
与那国	bi gga		minuga	

「男」と「女」をそれぞれ分布図にえがいてみよう。(以下、分布図参照)。

「男」についていえば、キキガ系・ビキドモ系・ビンガ系がある。キキガ系は奄美・沖縄の北琉球に分布し、ビキドモ系は宮古・八重山の南琉球に分布している。ビンガ系は与那国島にあって、前項のビン-の部分には南琉球に通じる特徴であり、後項の-ガの部分には北琉球に通じる特徴である。

「女」の語形の分布図をみると、ヲナゴ系とキナゴ系・ミドモ系・ミヌガ系があることがわかる。ヲナゴ系とキナゴ系は北琉球に分布している。ミドモ系は南琉球に分布している。ミヌガ系は与那国島にあって、前項のミ-は南琉球に通じる特徴であり、後項の-ガは北琉球に通じる特徴である。

『おもろさうし』(〈お〉印)と『混効験集』(〈混〉印)には「男」と「女」が、

男 ゑけが〈混〉 ゑくかくお

女 まゑなご(真女)〈混〉 おなごあんじ(女按司)〈お〉 ゑどむあんじ(女按司)
 〈お〉 おなちゃら(女按司)〈混〉

のように現われる。

以上から、「男」と「女」の琉球方言祖形を考えてみよう。「男」についていえば、北琉球の諸方言の jigga, wuiga, jikiga, wikiga, ʔukiga, ʔuɸugga などの諸形から *wekega をたてることができる。南琉球の bikidumu, bikidun, bigidun, biɕidun などの諸形から *wekedomo をたてることができる。この両祖形は *weke- の要素と *-ga *-domo の要素に分析できる。つまるところ、北琉球の祖形は *weke-ga であり、南琉球の祖形は *weke-domo である。

「女」についていえば、北琉球の wonagu, wunagu, wunak, winagu, jinagu などから、*wonago をたてることができる。南琉球の midumu, midum, mi:dum などから *medomo をたてることができる。この両祖形は *wona- *me- の前項と、*-go *-domo という後項に分析できる。つまるところ、北琉球の祖形は *wona-go であり、南琉球の祖形は *me-domo であることになる。

これらの考察から、現代の琉球方言には、

〈A〉 *weke-domo (男) *me-domo (女)

〈B〉 *weke-ga *wona-go

にさかのぼりうる二つの層が重なっていることがわかる。前項の要素である *weke- と *wona は「ゑけり」(男のきょうだい)と「をなり」(女のきょうだい)の「ゑけ-」「をな-」に対応する形であろう。*me- は「女」に対応する形である。北琉球で *wona- が用いられ、南琉球では、*wona- ではなく *me- が用いられていることは、「をなり神」の信仰が北琉球ではさかんで、南琉球では稀薄であることと関係があるのかも知れない。

*weke-ga の語尾 ga はどのような要素か。多くの方言では jigga (男), wunagu (女) の語尾 -ga, -gu のように a と u で異なっているが、与那国島に bigga (男) minuga (女) があることを考慮に入れると、語尾の -ga, -gu は同一要素を含むものと判断される。-ga はおそらく -ko (子) に愛称辞の a が付いて、

*weke + ko + a → wekegoa → wikiga

のように形成されてきたものであろう。

4 年令差(絶対的)——「おとな」「としより」「若者」「子供」「赤坊」

現代首里方言では年令差を表わす語彙として、

ウフツチュ ?uɸuttɕu (おとな)

ウキツチュ ?wittɕu (としより)

ワカムン wakamun (若者)

ワラビ warabi (子供)

アカングワ ?akaŋgwa (赤坊)

などがある。これらに対応する琉球諸方言の例をあげよう。

奄美大島浦上

ɸuttɕu (おとな) ?uttɕu (としより)

warabi (子供) habittɕa (赤坊)

喜界島志戸桶

?uɸuttɕu (おとな) ?uttɕu (としより)

warabi (子供) ?a:ŋa:, ?a:bo: (赤坊)

徳之島井之川

?uttɕu (おとな) ?uitɕu (としより)

wareŋgwa (子供) ?a:gwa: (赤坊)

沖永良部島田皆

?uɸuttɕu: (おとな) tufijui (としより)

warabi (子供) tɕinumigwa (赤坊)

与論島麦屋

ʔupupitʃu (おとな)	tusui (としより)
warabi (子供)	ʔahaŋga (赤坊)

沖縄奥武

ʔupupitʃu (おとな)	ʔi:ttʃʊ (としより)
warabi (子供)	ʔakaŋgwa (赤坊)

宮古島大神

upupitu (おとな)	ui pitu (としより)
jarapi (子供)	akagka (赤坊)

八重山川平

ʃu: pitu (おとな)	ui pitu (としより)
ʃa: nama (子供)	

与那国

ubutʃu: (おとな)	uitʃu (としより)
agami (子供)	agaga (赤坊)

これらの語のそれぞれについて、分布図をえがいて概観したい。

琉球方言の「おとな」をあらわす語はすべて *opopito (大人) にさかのぼる。前項の *opo- (大-) によって語形を分類すると、ウブ-系、ウフ-系、ウ-系、ポ-系、フ-系、ウブ-系に分かれる。そのうち、ウブ-系は宮古諸方言で upupitu として分布する優勢語形である。これは八重山のウブ-系と対比される。そして与論島には ʔupupitʃu、沖縄伊江島と久高島には ʔuputʃu がある。ウフ-系は ʔupupitʃu、ʔuputʃu などであるが、沖縄本島を中心に、北は喜界島にひろがり、他の奄美にも点在する。南は八重山地域にも点在している。何と云っても沖縄本島を中心とする分布状態を示している。ウ-系は ʔutʃu: , ʔu: tʃu, u: pitu などであるが、奄美大島南部を中心に分布している。ポ-系の pʔotʃu は沖縄北部の名護にあって分布は狭い。フ-系の ʃutʃu, ʃu: tʃu ʃutʃu: などは奄美大島・徳之島・沖永良部島に分布し、ʃu: pitu などが八重山に分布している。ウブ-系の ʔubutʃu が喜界島花良治に、ubupisu が八重山黒島に、ubutʃu: が与那国島に、bu: pitu が八重山波照間島に分布している。後項の *-pito は単独に用いる「人」の語形とほぼ一致している(分布図参照)。

『おもろさうし』には「おとな」の語例は見当たらないが、「大」を表わす語として、漢字のほか、仮名表記の「おほころた」(大ころ達, 男の美称), 「おほたはる」(太田原, 地名) などがある。「おほ」とは別に「大」の意を示す語として「うき-はた」(大旗), 「うき-はわ」(大祖母), 「おき-おほち」(大祖父), 「おきよ-おほち」(大祖父) のように「うき-」「おき-」「おきよ-」がある。「おほ」と「うき」の関係が問題として残る。

琉球の「としより」を表わす語には、オイヒト系、オイモノ系、トシヨリ系、ウフツチュ系などがある。オイヒト系はさらにウイ-系、キ-系、ウ-系、イ-系になるが、北琉球にも南琉球にも

分布しているところから、琉球方言のもっとも基本的な形と見ることができる。オイモノ系は徳之島に見られる。これは「人」のかわりに「者」を要素としてとり入れた形である。

注目すべきは宮古方言の *ui-* である。宮古ではイ段母音は中舌母音の *i* に対応するのに「老い」が *ui-* となって、音韻的には例外となっている。

トシヨリ系は沖縄本島と与論島・沖永良部島に濃厚に現われるが、オイヒト系と併用される地域もある。トシヨリ系は明治以降の共通語教育によって入ってきた新語形と思われる。ウフツチュ系は奄美大島南部の瀬戸内町に現われるが、音韻変化の過程で「おほひと」(おとな)と混同した形であろう。

『おもろさうし』には「おい人」(老人)の形で現われる。これは上代語の「おいひ_甲と_乙」(老人)に対応する形である。

琉球では「子供」を表わすのに、ワラベ系がもっとも優勢語形である。ワラベ系は語頭のワー、ヤーのちがいによって、ワラベとヤラベに分かれる。ワラベの形は北琉球の奄美・沖縄に分布する形であり、ヤラベは南琉球の宮古・八重山に分布する形である。南琉球ではワ行音は *ba* に対応するのが通則だが、この語においては *jarabi* のように例外となっていて、語頭が法則通り *b* になる方言は一例もないのである。これはいったいどうしたことか。

ふりかえって、中央語においては「わらべ」は「わらはべ」の転訛したものとされている。つまり奈良朝期の中央語では「わらは」(童)だけがあって、平安朝期以降、これに「べ」が付いた「わらべ」の形が一般化したようである。

この中央語の変化過程を視野に入れて考えてみると、琉球方言の *warabë*, *warabi*, *warai*, *jarabi*, *jarai* など、ワラベ系の諸形は、すべて「わらべ」の形にさかのぼるのであって、「わらは」にさかのぼる形は一例もない。こう見てくると、琉球のワラベ系は、平安朝期以降の中央語を移入したものと解さざるを得ない。琉球に残るワラベ系は、古語が残っているとは言っても、比較的新しい古語の部類に属するということになる。

『おもろさうし』にも「わらへ」(子供)の形があって「わらは」の形は存しない。

宮古・八重山の南琉球一帯で「わらべ」が *jarabi* のように語頭音 *ba* になっていないのは、どう考えたらよいか。それは、

①「わらべ」が移入された時に、すでに *wa* → *ba* の音韻変化が終息していて移入語を変化させるほど力がなかったのか、

②「わらべ」は はじめから語頭をヤ行音として *jarabi* の形で移入したために、*wa* → *ba* の音韻変化の波が及ばなかったのか、

のいずれかと思われる。もし、①であったとするならば、南琉球の *wa* → *ba* の音韻変化の時期は平安朝期より古い時期であったと見なければならないだろう。

ワラベ系のほかに、「子供」を表わす語としてファー系があるが、*ɸa:* - は「子等」が

**ko ra* → *fura* → *ffa* → *ɸa:*

のように変化したものである。この変化は南琉球の特徴的な音韻変化である。後接の *- nama* およ

び -ma は愛称辞であろう。

さらに、珍しい形として与那国島ではアガミが、波照間島ではウタマがある。

「若者」は、南琉球のバカムヌ系と、北琉球のワカムヌ系に大きく分かれる。語中の k 音の変化によって多くの異語形を生み出している。

5 年令差（相対的）——「年上」（兄姉）, 「同年」, 「年下」（弟妹）

沖縄では「年上」にはシーザ, 「年下」にはウットゥというのが普通である。シーザは年令がわずかでも上である者に対して言うのであって、一年以上の差があればトゥシシザ（年シザ）, 一月以上の差があればチチシザ（月シザ）という。親族の兄・姉に対しても、血縁関係のないまったくの他人に対してもいう。ウットゥは共通語のオトートに対応する語である。ところが、その表わす意味は大いに異なる。共通語のオトートは親族語彙として「弟」の意味だけに用いられるのに対して、琉球のウットゥは親族語彙としての「弟」ばかりではなく、「妹」のことに用いられ、さらに、親族と関係なく、もっと意味領域が広く、「年下」という年令差を表わす語としても用いられているのである。つまり、シザ / ウットゥは年令の上下差を表わし、男女差は表わさない。

現代首里方言では、年令差を表わす語彙として、

年上 シーザ siʔdza または トゥシシーザ tuʔisiʔdza
 同年 キヌトゥシ jinutuʔi または チュトゥシ tʃutuʔi
 年下 ウットゥ ʔuttu

がある。キヌトゥシ（同年）のキヌは「同」を表わす要素で、キヌツチュ jinuttʃu（同じ人）, キヌムン jinumun（同じもの）のように用いられる。チュトゥシのチュは、「一つ」を表わす要素であるが、チュトゥシは「同年」の意を表わす。

琉球諸方言では、どのようなすがたになっているか。その主な方言例をあげてみよう。

奄美大島浦上

siʔdza（年上） tʃittusʔi（同年） ʔututu（年下）

奄美大島大和浜

sedza（年上） tʃittuʔi（同年） ʔututu（年下）

奄美大島湯湾

siʔda（年上） tʃiʔduʔi ʔututuʔ:（年下）
 また jintuʔi（同年）

喜界島志戸桶

ʃidaʔ:（年上） duʔnin（同年） tuʔisaʔ
 また ʔuttuʔ:（年下）

徳之島井之川

ʃiʔda（年上） tʃʊʔtusʔi（同年） ʔuttu（年下）

沖永良部島田皆

tuʃiʃida

junutufi

tuʃinufa:

また ʃida (年上)

また junutʃiri (同い年)

また ʔutu: (年下)

沖繩奥武

ʃidʒa (年上)

juntufi

ʔuttu (年下)

また jintʃiruma: (同い年)

宮古大神島

suda (年上)

junupu:re (同い年)

ututu (年下)

八重山川平

ʃidʒa また ɕidʒa (年上)

ɕutudu (年下)

与那国

suda (年上)

dunutufi (同い年)

ututu (年下)

ここで「年上」と「年下」の語について分布図をえがいて考察をすすめたい。

「年上」についての方言形は、セザ系、アザ系、ヤクメ系、アッピー系、アニ系、ビラ系などである。これらの語形は「男性の年上」として質問した項目についての形である。したがって、これらの語形は「兄」を表わすものと解される。男・女の年上の総称についての資料としては不十分であることをあらかじめ断っておく。

分布を概観すると、セザ系は、琉球全域に分布するもっとも基本的な語形である。ときには他の語形と併用されることもある。

アザ系は宮古方言でさかに用いられている語形である。これは分布から見てかなり古い語と予想される。

ヤクメ系は北琉球の奄美と沖縄の地域に現われる語である。これは琉球王朝の階級名としての「大屋子思い」(地方長官、「思い」は尊称辞)が、目上の人に対する尊称として一般化していったものと察せられる。北琉球の jakumi, jakki:, jattʃi:, jammi:, jammi:, mi:, mi: などは、この語から派生したもののようなものである。そうだとすれば、ヤクメ系は、琉球王朝の階級制度が確立される十四、五世紀以降に奄美・沖縄地域に広まった語であると推定することができよう。セザ系、アザ系より新しい語と見ることになる。

アッピー系が沖縄中南部にあり、アニ系は奄美大島南部に集中し、ビラ系は、わずかに八重山新城島に現われる。

「年下」についての方言形は、オトト系、オット系、オチト系、オトド系に分かれるが、これらは音韻変化による異形であって、すべて *ototo にさかのぼる形である。

「年上」(兄)「年下」(弟)について『おもろさうし』には、

年上(兄) 「せさ」または「すさ」

年下(弟) 「おとと」「おとゝ」

の形が見える。「せさ」「すさ」の「さ」はおそらく濁音の「ざ」を表記したものであろう。おも

ろ時代には da が dza に変化していたことがわかる。「せさ」「すさ」はさらに「おもいせさ」(思い兄)、「せさのおやおもい」(兄の親思い)、「せさのおやくもい」(兄の大屋子思い)、「すさへ」(兄部)、「すざべ大さと」(兄部大里)、「すさへし」(兄部子)などの語をつくる。「おとと」「おとゝ」は「おとゝきみ」(妹君)、「おとときみきみまさり」(妹君君勝り)、「おとゝきみはゑ」(妹君南風)、「おときみまさり」(妹君勝り)、「おとゝまちとよたる」(弟松鳴響たる)などの形をつくる。このような「せさ」「おとと」は、現代琉球方言のセザ系、オトト系につながる形である。「おとと」の意味も男女の区別なく年下の者について用いており、現代の琉球方言と同じである。

『おもろさうし』の「せさ」または「すさ」および現代琉球方言のセザ系の語は、どのような語であろうか。

それは、「姉」を表わす *se と、「兄」を表わす *da とが結合してできた「姉兄」が原形であると考えられる。*da はさらに *di と *a に分析される。

「姉」を表わす *se は現代の奄美大島の ?afe, ?affe, ?aseɣ, ?asekkwa, ?asagwa: (いずれも姉の意) などの中に残っている。この語は上代語の「夫・恋人・兄弟・友人」などを表わす「せ」(兄・背)と関係のある語と予想される。

「兄」を表わす *da は、宮古方言の ada, adga, adza (いずれも兄の意) の中に見出される。宮古方言のこれらの形は、いずれも *a (吾) と *da (兄) に分析されるものである。

結局、琉球のセザ系の語源は、「姉」の *se と「兄」の *da が結合した *seda (姉兄) にさかのぼることができる。

「兄弟」のことを、現代首里方言ではウトゥザンダ ?utudzanda, 奥武ではウトゥダンダ ?utudanda といっているが、『おもろさうし』には「おとちや」「おとぢや」「おとぢやへ」があり、『混効験集』には「おとちや」「おめとちや」などがある。そして『混効験集』には、

おめとちや 兄弟の事 おとちやむだ とも おめと云字をいふ時は敬ふ言葉なり
只 おとちや共云

と注記があり、当時、「おとちや」「おとちやむだ」が「兄弟」を表わす語としてあったことがわかる。したがって、現代のウトゥザンダ、ウトゥダンダが、この「おとちやむだ」にさかのぼる語であることが明らかとなった。そして、この語は、

「おと」(弟) 「ちや」(兄) 「むだ」(達?)

に分析され、「おと」が *oto, 「ちや」が *da にさかのぼることがわかる。つまり、「きょうだい」という総称をつくるのに、「弟」と「兄」の両語を結合させていることがわかる。「むだ」は「達」を表わすようだが、一考を要する。これに類する語として、琉球には「夫婦」を表わすミートゥンダがあるが、これも、

「め」(女・妻) 「をっと」(をひと・夫) 「むだ」(達?)

のように分析される。

琉球方言では総称をつくる場合、一般に

「男性と女性を結合させる時には、女性を表わす語を前に、男性を表わす語を後にする」という造語法があったであろう。ほかにその例をあげれば、

キナイキキー（をなりゑけり・男と女のきょうだいの意）、ファーフジ（ははおほぢ、祖母祖父・祖父母の意）キナグワラビ（女子供）

などがある。

以上の考察から、年令差を表わす琉球方言の祖形として、

年上の総称	*seda（年上）	
年上の男女差	*da（兄）	*se（姉）
年下の総称	*ototo（年下）	

を設定することができよう。さらに基本的な形は、

年上の男女差	*da（兄）	*se（姉）
年下	*ototo（年下）	

ということになる。

ちなみに、『おもろさうし』の「おとちや」「せさ」について、それぞれ「弟者」「兄者」を当てているのを見るが、これはそれぞれ、「弟兄」「姉兄」とするのが正しいということになる。

6 親疎——「友」

親疎関係を表わす語彙のうちから、「友」について考察してみよう。現代首里方言では「友」をドゥシ dufi という。ドゥシビレー dufibire:（友だちづきあい）、ドゥシムチリ（友もつれ。友だちと親しく遊んで家に帰ることさえ忘れてしまうほど熱中すること）などの派生語がある。

「友」について琉球諸方言の分布図をえがいて見ると、アグ系、エージュ系、ドゥシ系、ホーハイ系、トモガラ系があることがわかる。

アグ系は北琉球の中では沖永良部島・与論島に分布している。宮古にはアグ agu と dusi があるが、アグは年令が近くても離れていても、これと関係なく「親友」である場合をいい、ドゥスは比較的同年配の者同志をいう。分布図ではドゥスだけを示した。

いったいアグはどのような語か。その語源は「吾具」ではないか。「具」は「揃い、または対になるもの」の意であり、平安朝期には「貴人に付き添う人。お相手。連れ添う人。配偶者」などの意で用いられていた。おそらく、この語が発達したものであろう。この「具」が上代語に見られないのは、この語の移入が比較的新しく、平安朝期以降であることをうかがわせる。

エージュ系は沖縄北部に見られる。「間中」に対応する語か。

ドゥシ系は北琉球にも南琉球にも分布し、琉球方言の基本的な形と認められる。

ドゥシの語源は何か。「ど甲ち」と「同志」のいずれかであろう。「ど甲ち」とすれば、この上代語の第二音節「ち」を ji に変化させて移入したものと考えなければならない。これは、「早朝」の「つとめて」が琉球に入るときはストメテのように、その頭音をスに変化させていることと同類

である。もし、「同志」とすれば、この語は上代語にはないから、室町以降に伝播した語とみることになる。この考え方の難点は、琉球諸方言のドゥシ系に長音が失われている点である。長音を失う音韻的根拠がないからである。したがって上代語の「ど甲ち」にその語源をもとめる可能性が大きいのではないか。

「友」について、『中山伝信録』に「朋友 獨需」の記述があり、『琉球戯曲辞典』に「どしむつれ」の形が見られる。『おもろさうし』には現われない。ちなみに、『全国方言辞典』（東条）には、

かたいどし （語同志の意） 朋輩，佐賀。

どうし （仲間） 南島。

ちんちんどーし （親友） 熊本県天草。

などの形が現われている。

トモガラ系は宮古にあるが、これは『おもろさうし』に「ともかなし」（友加那志）、「ともから」（輩），『混効験集』に「ともからはさそて」（輩を誘引して）が現われている。

参考文献

『伊波普猷全集』 平凡社

『おもろさうし辞典・総索引』 仲原善忠・外間守善，角川書店

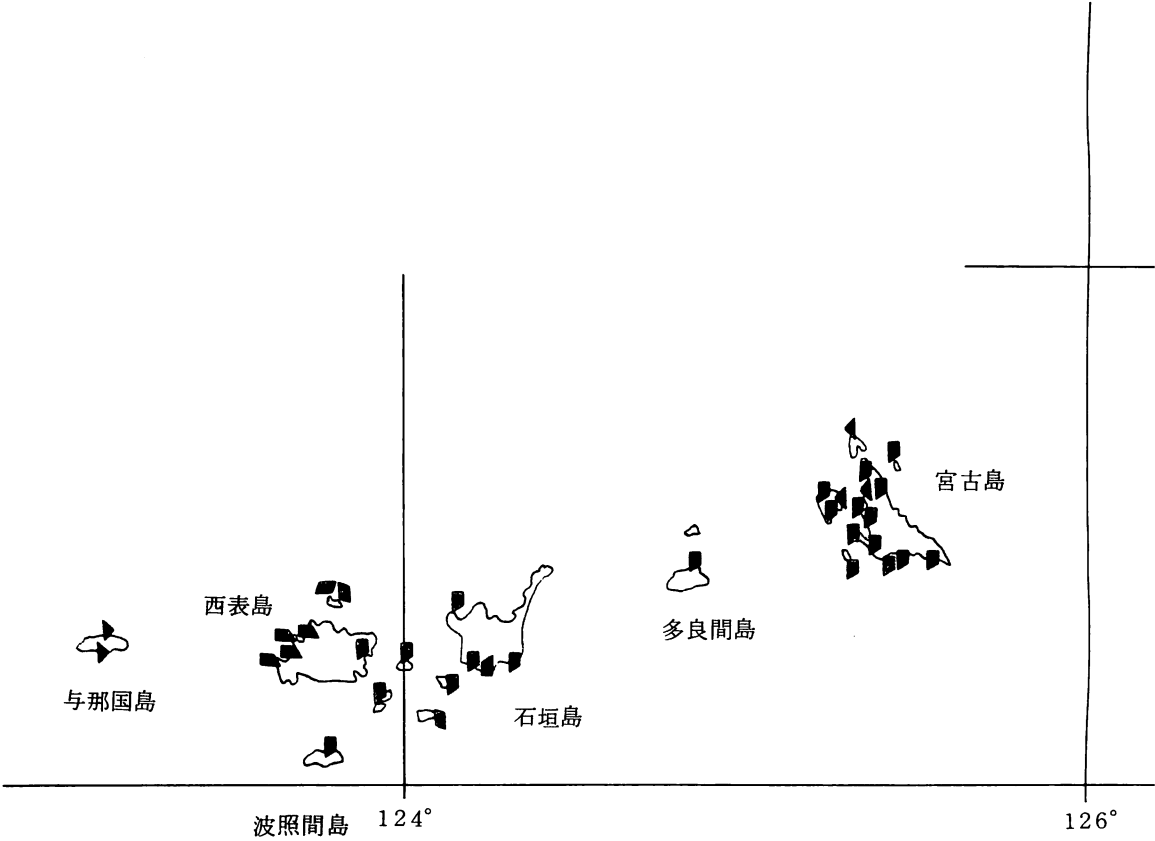
『混効験集』 外間守善，角川書店

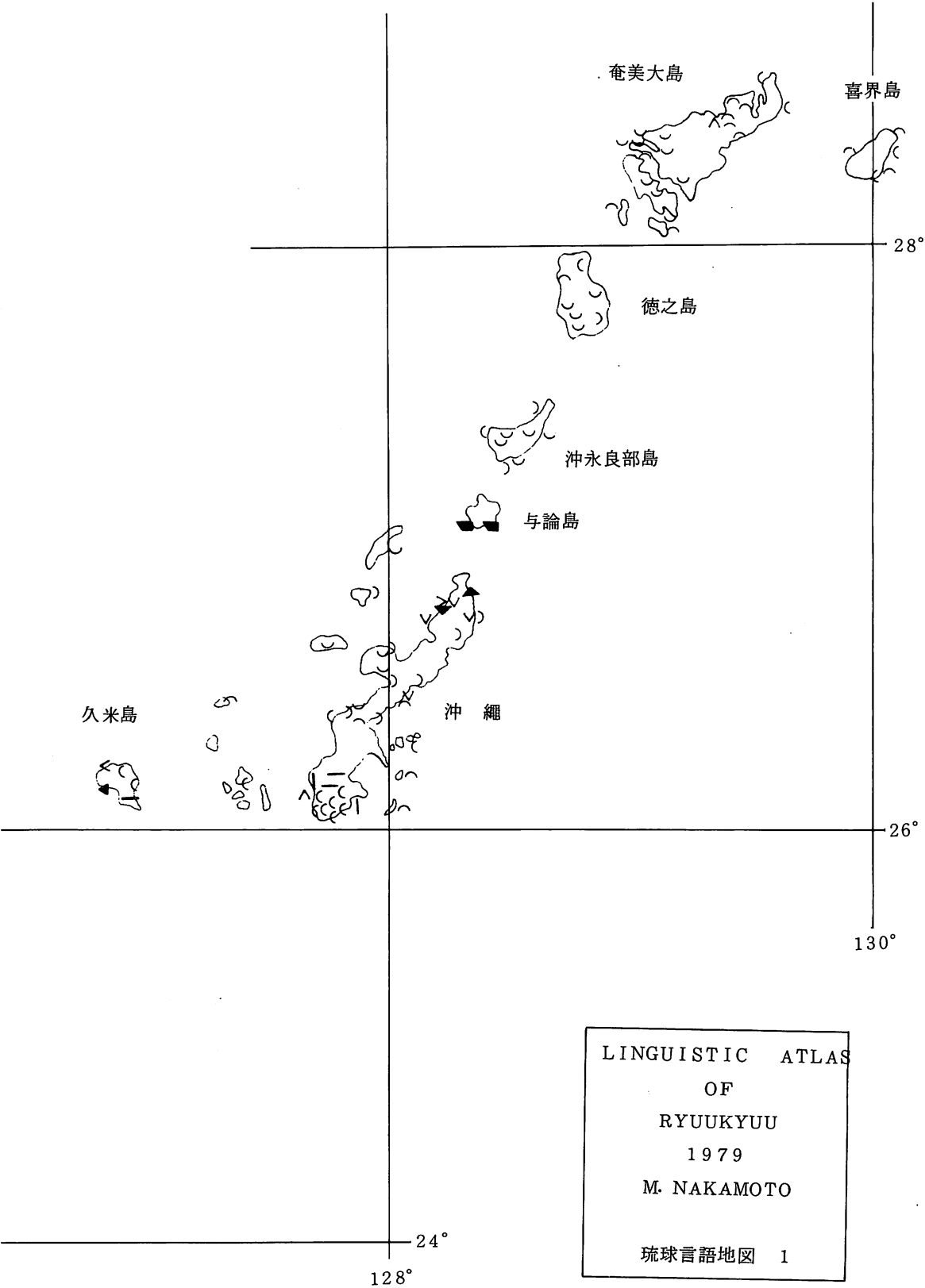
『琉球方言音韻の研究』 中本正智，法政大学出版局

『奄美方言分類辞典』 上巻 服部四郎序，長田須磨・須山名保子共編，笠間書院

人

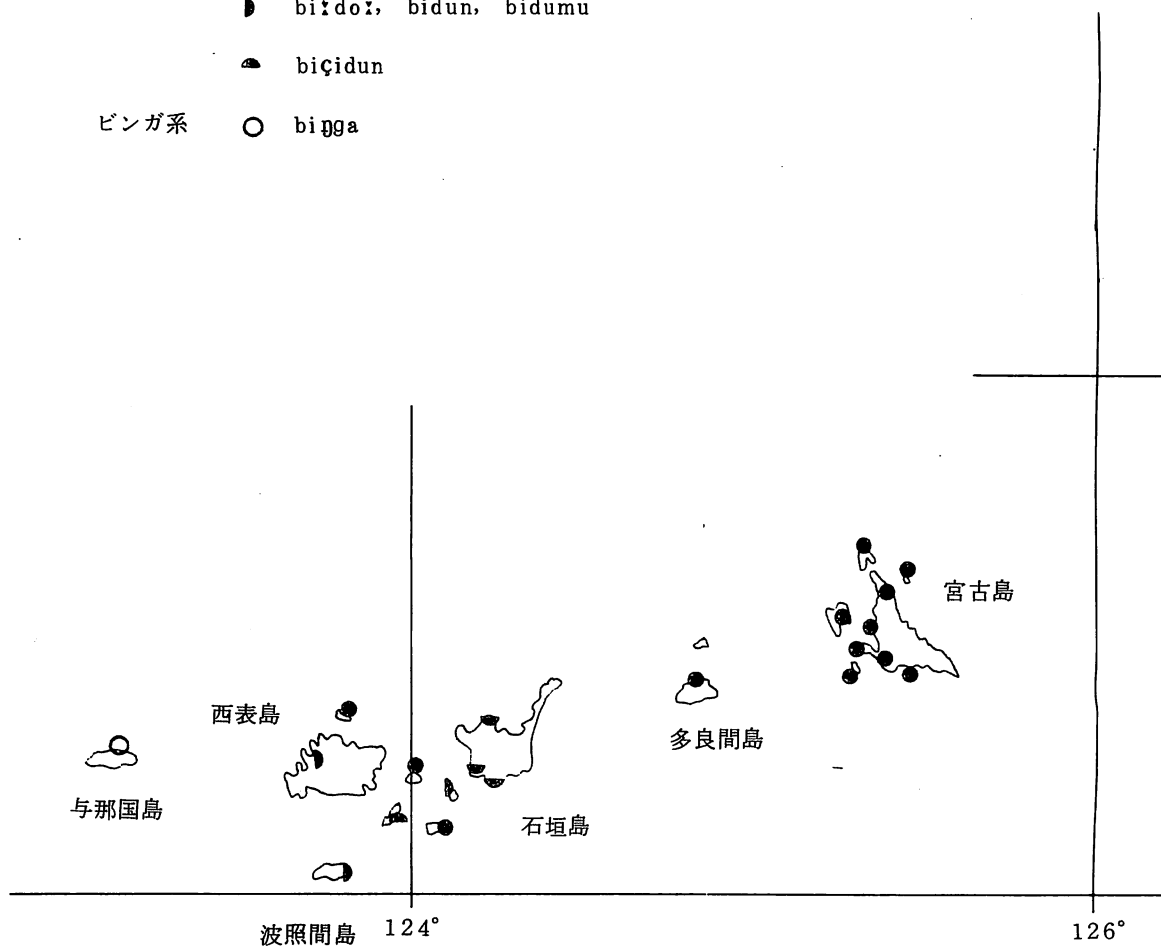
ピトゥ系	■ pītu, pītu	▤ pītu	▥ pytu
	▦ pitfu	▧ pīsu	▨ pusu
ヒトゥ系	◀ Çitu	▶ tʔu:	▲ tu
	▼ tu:	◀ Çitsu	
チュ系	∩ tʃʔu(ʔ)	∪ tʃʔu:	(tʃu(ʔ)
	˘ tʃu:	∧ tsʔu	∨ tsʔu:
	< tsu	> tsu:	tʃʔu
	— tʃfu		

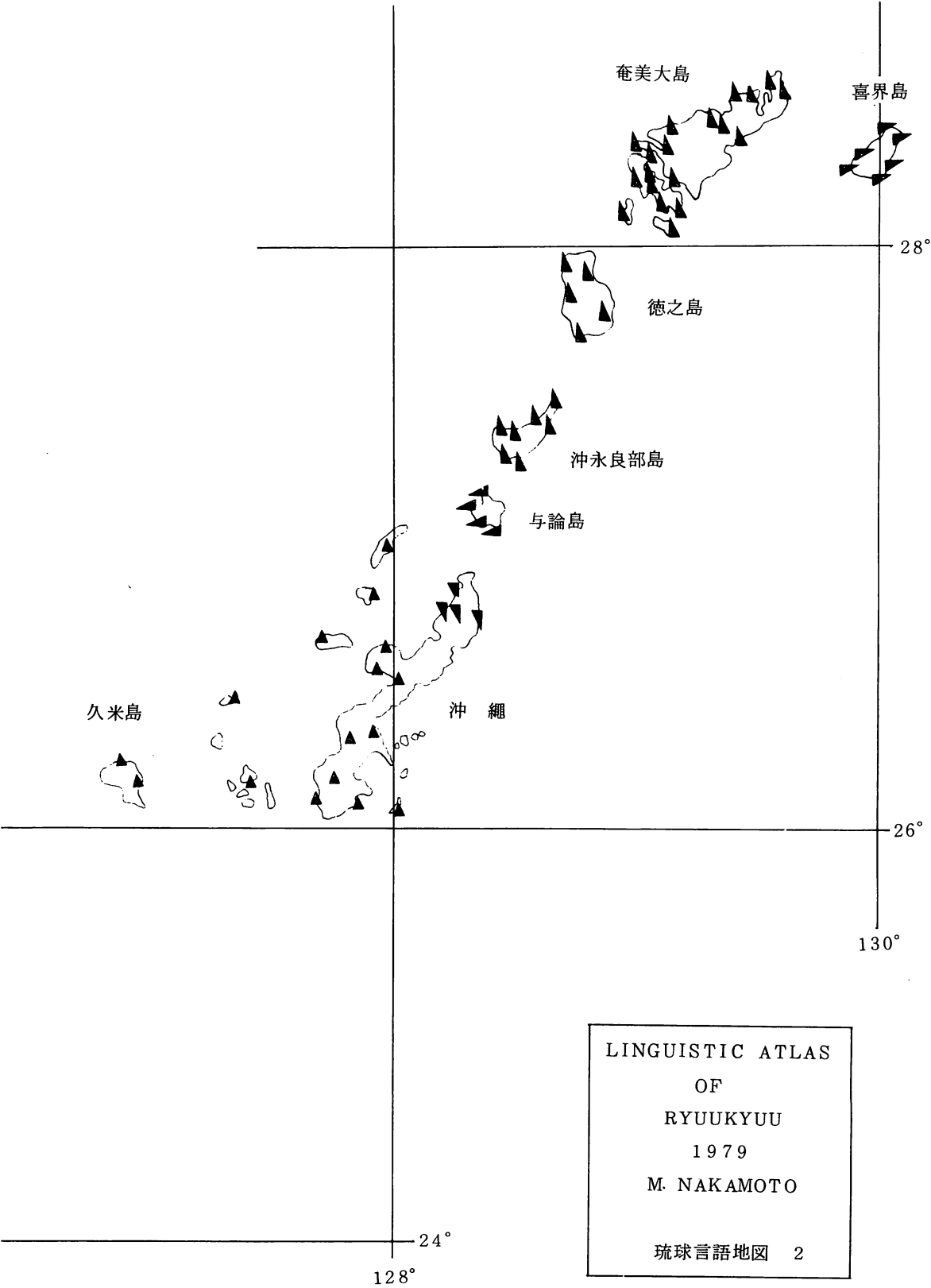




男

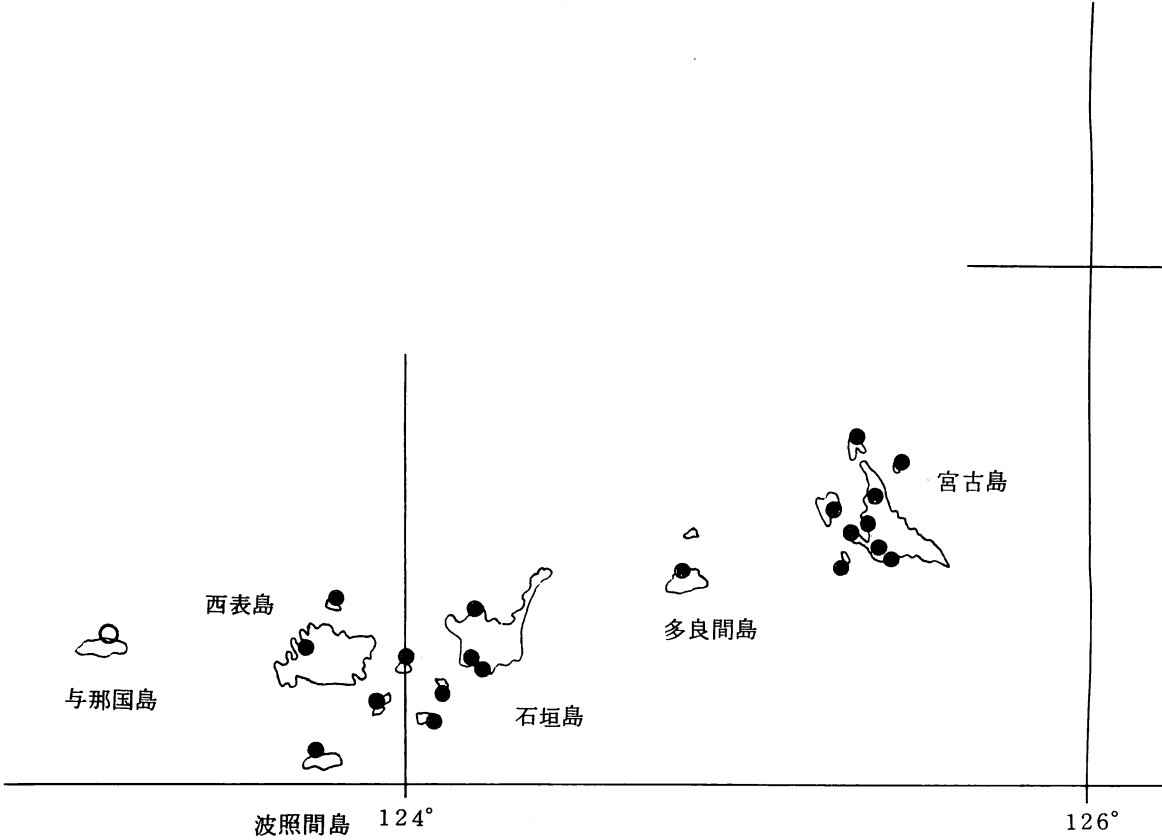
- キキガ系 ▲ wigga, jiggga, jiggga, jeggga
 ▼ wigga, jiggga
 ▲ wuiga, puiga
 ▼ ʔugga, ʔuɸugga
 ▲ wikiga, jikiga, jikigaɿ, ʔikeɿgaɿ,
 ʔikiga, jukiga, ʔukiga, ɸkiga
- ビキドモ系 ● bikidumu, bikidum, bikidun, bikindun
 ◐ bigidun
 ◑ biɿdoɿ, bidun, bidumu
 ◒ biɸidun
- ビンガ系 ○ bigga

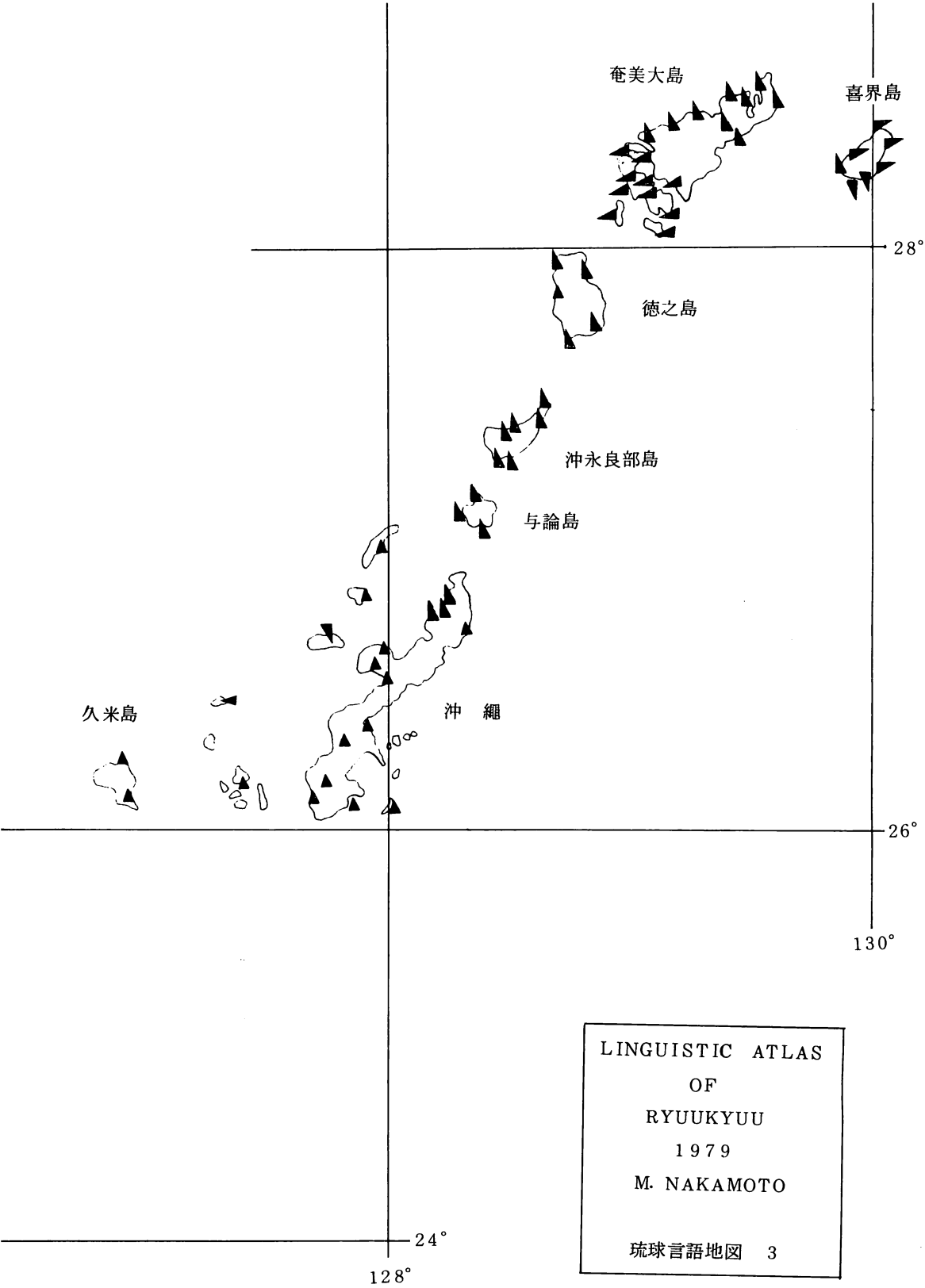




女

- ヲナゴ系 ▲ wonagu, wunagu, wunagu:, ʔunagu, ɸunagu
 ◄ wonak, wunak, juna:k, ʔuna:k
 ► wunagu, wunan
 ▼ gunau
- キナグ系 ▲ winagu, jinagu, jinagu:, jina:gu:, ʔinagu
 ▼ jinau ◄ ɕinagu
- ミドモ系 ● midumunu, midumu, midum, mi:dun, mindun, mi:doː
- ミスガ系 ○ minuɣa





おとな (大人)

ウブー系

■ upupītu_(o)

■ ʔupupitʃu

■ uputʃu

ウフー系

▲ ʔuɸupitʃu

▶ ʔuɸutʃu()

◀ ʔuɸuʃu(ʔ)

▲ uɸupītu

▼ uɸuputu

▶ uɸupītu

◀ ʔuɸuttu

ウー系

△ ʔuttʃu(ʔ)

▽ ʔu:ʃu

> ʔu:tsu

< ʔuttsu

△ ʔottʃu:

▽ u:pītu

ポー系

◆ pʔottʃu

フー系

□ ɸuʃu

◇ ɸu:ʃu

▷ ɸutʃu(ʔ)

◁ ɸuttsu

| ɸu:pītu

— ɸu:ɕītu

■ ɸubbitu

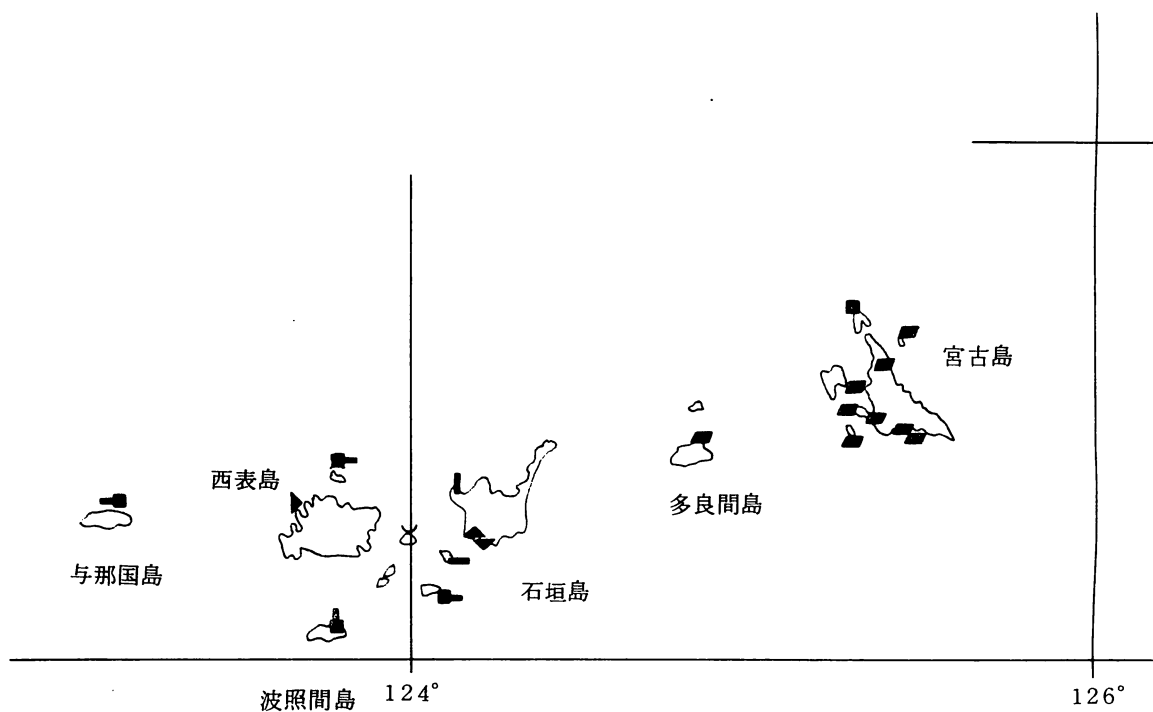
ウブー系

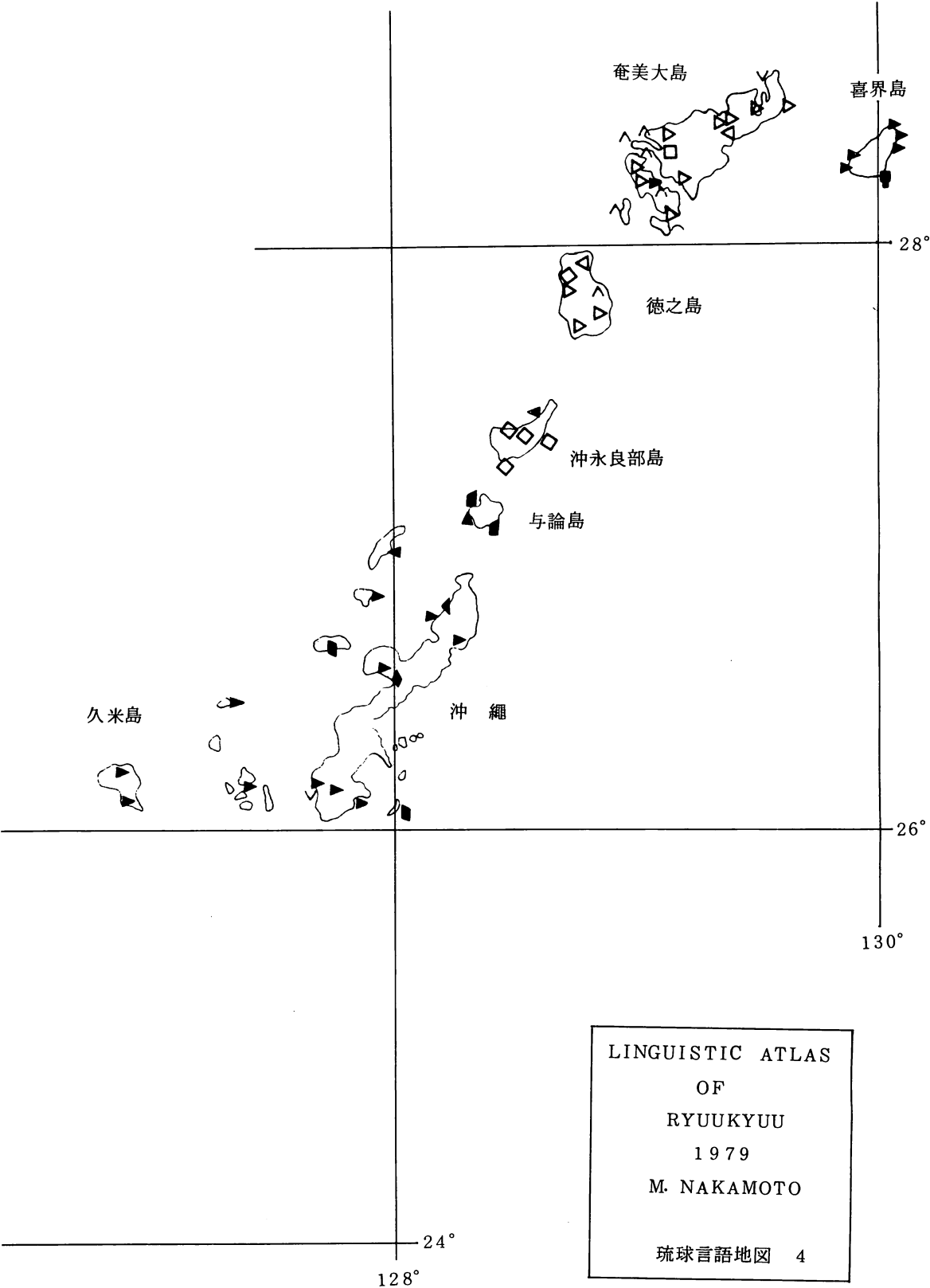
♣ ʔubutʃu

■ ubupisu, ubupusu

■ ubutʔu:

♣ bu:pitu





老人

オイヒト系

ウイ-系

▶ uip_(o)i_(o)tu

◀ uip_(o)i_(o)tu

▼ uiputu

▲ uip_isu, uipusu

▲ uif_itu

▶ uiçittu

◀ uibitu

▼ uit⁷u

キ-系

■ ?wit⁷u

■ wit⁷u

◆ ?wi:tt⁷u

◆ ?wi:u⁷u

ウ-系

| ?ut⁷u(:)

— ?u⁷u

イー系

■ ?itt⁷u

オイモノ系

● ?u⁷imun

● ?w⁷imun

トシヨリ系

(tufijuri

∩ tufijur

∪ tufijui

) rufijui

< tusui

> tufui

∧ tusuui

∨ tusuwi:

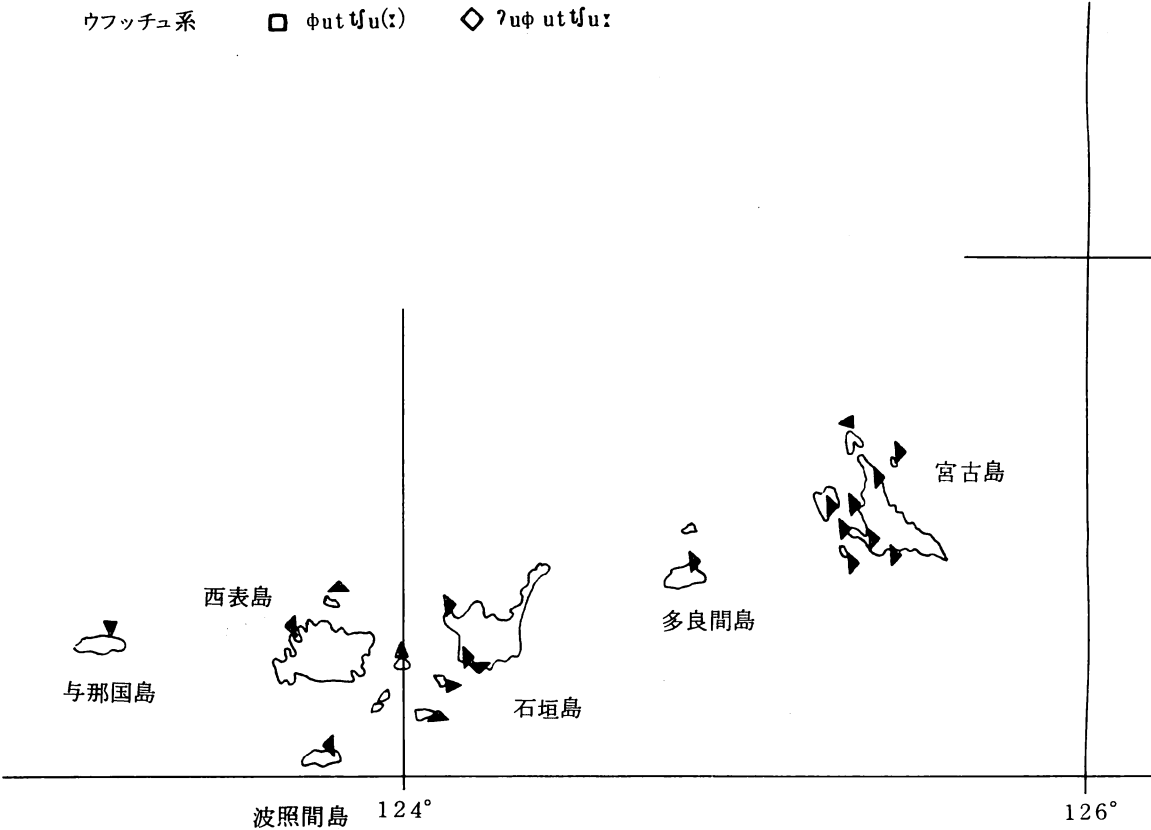
| tufiwui

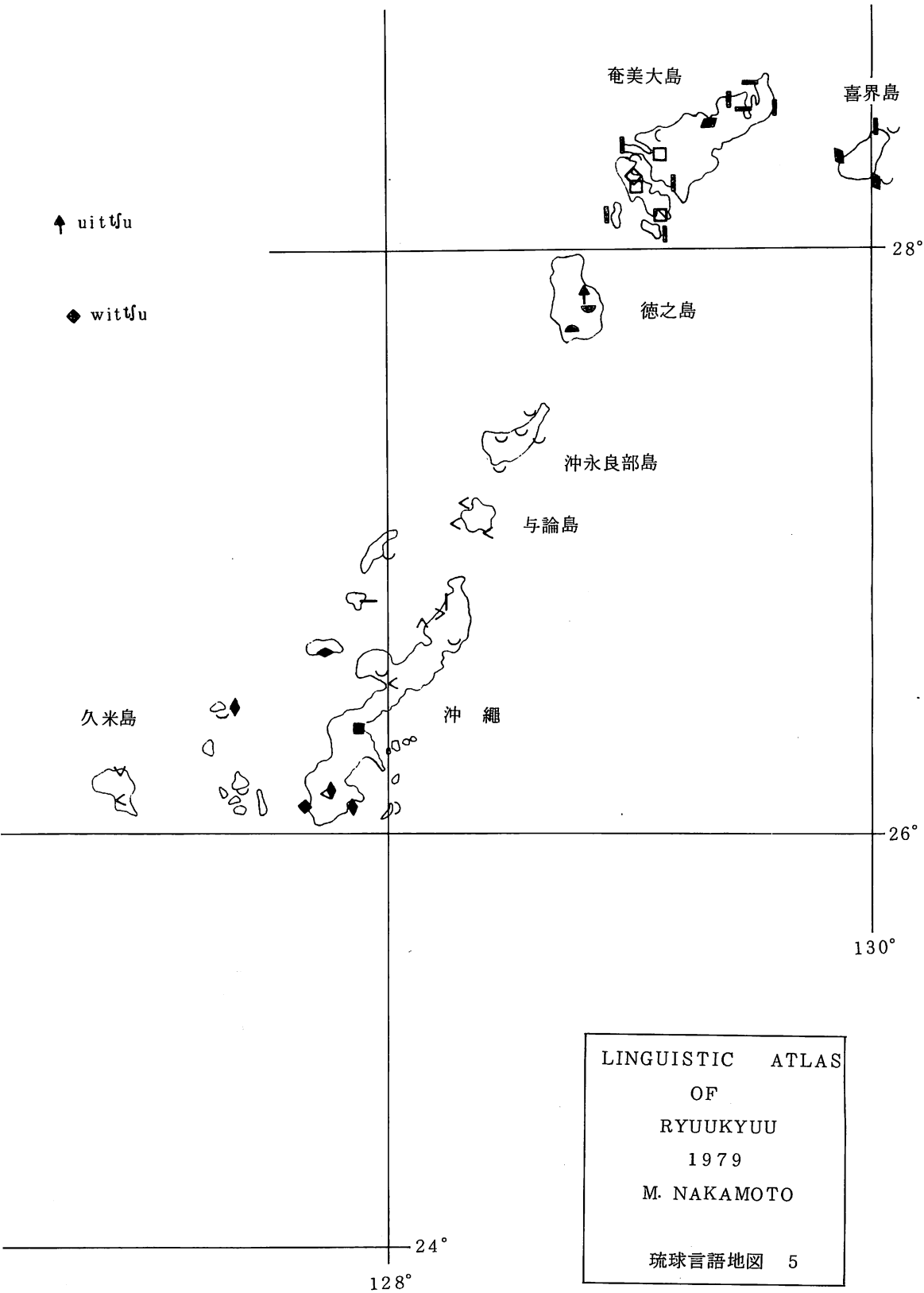
— tufiwi:

ウフツチュ系

□ φut⁷u(:)

◇ ?uφut⁷u:

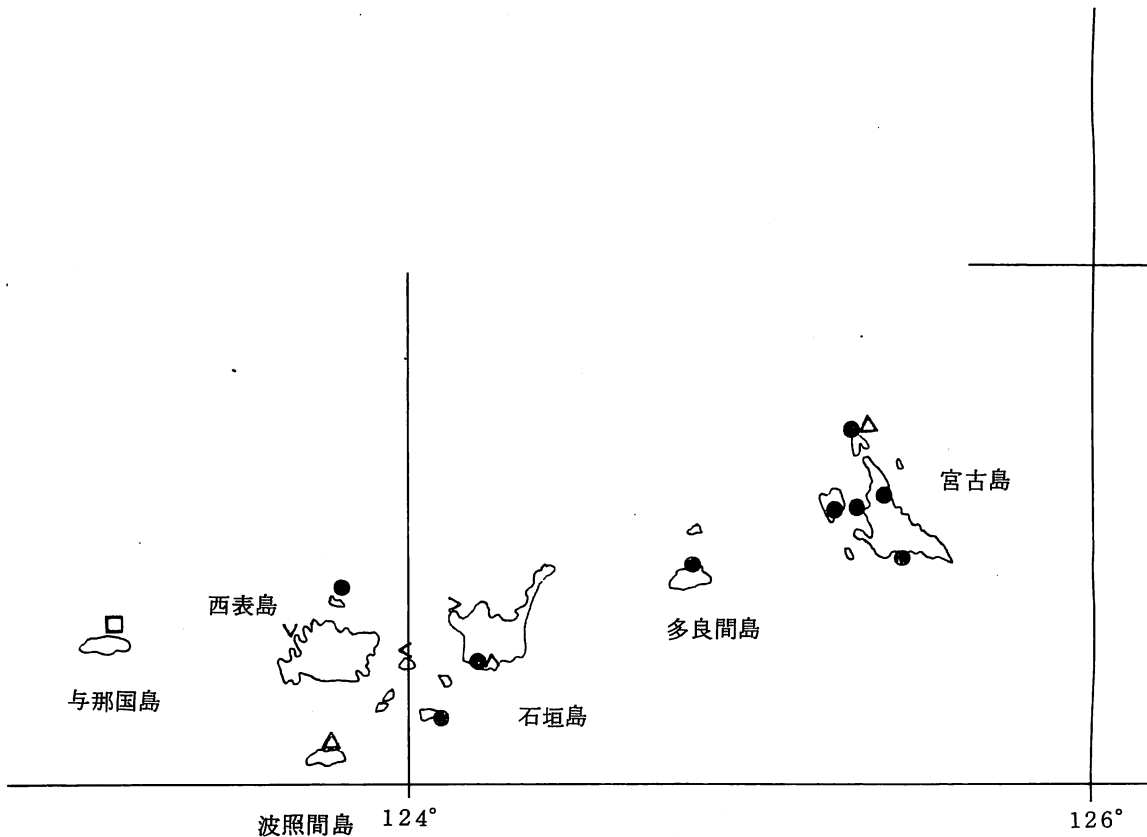


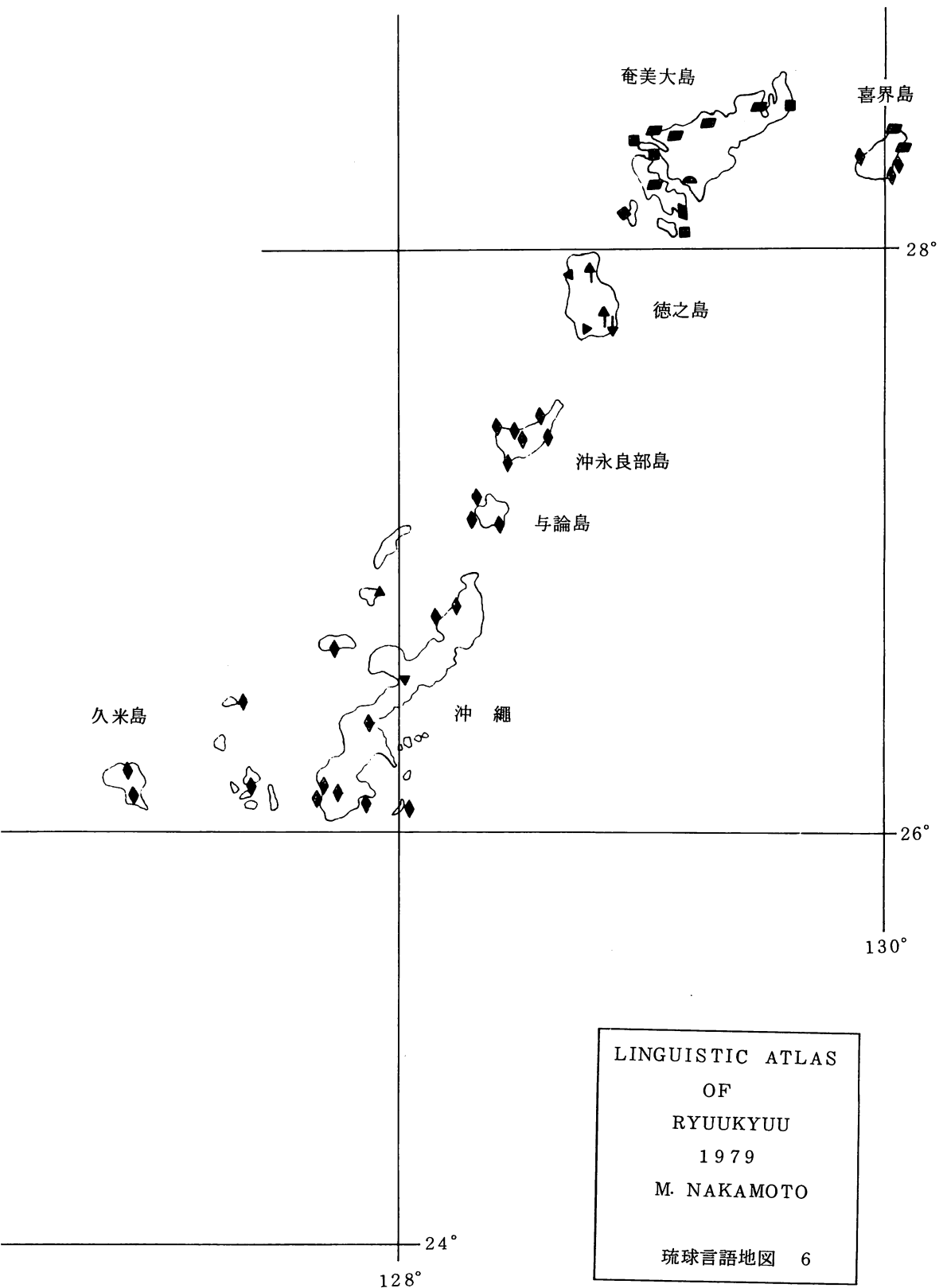


子 供

ワラベ系

ワラー	■ warabē(ɿ)	▣ warabī(ɿ)	▤ wara:bī:	◆ warabi
	◆ warawī			
	▲ warai	▼ wara:i	▶ ware	◀ ware:
	↑ warē	↓ waren		
ヤラー	◐ jarabī	● jarabi		
ファー	> fa:nama	< fa:ma	^ fa:na:	∨ fa:
アガミ	□ agami			
ウタマ	△ utama			





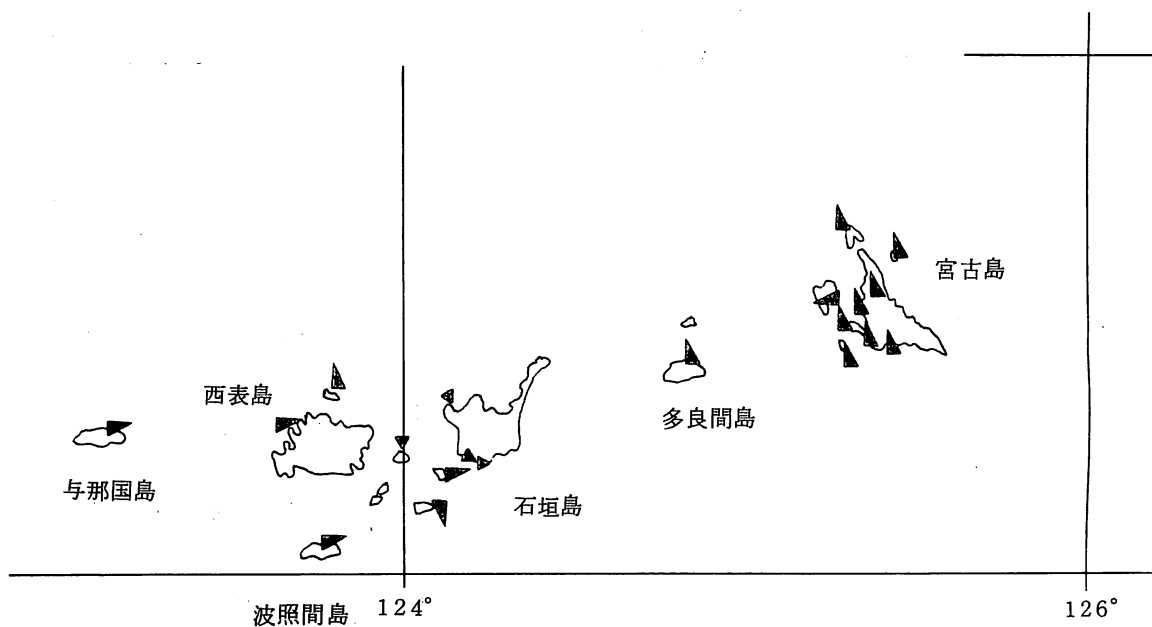
若 者

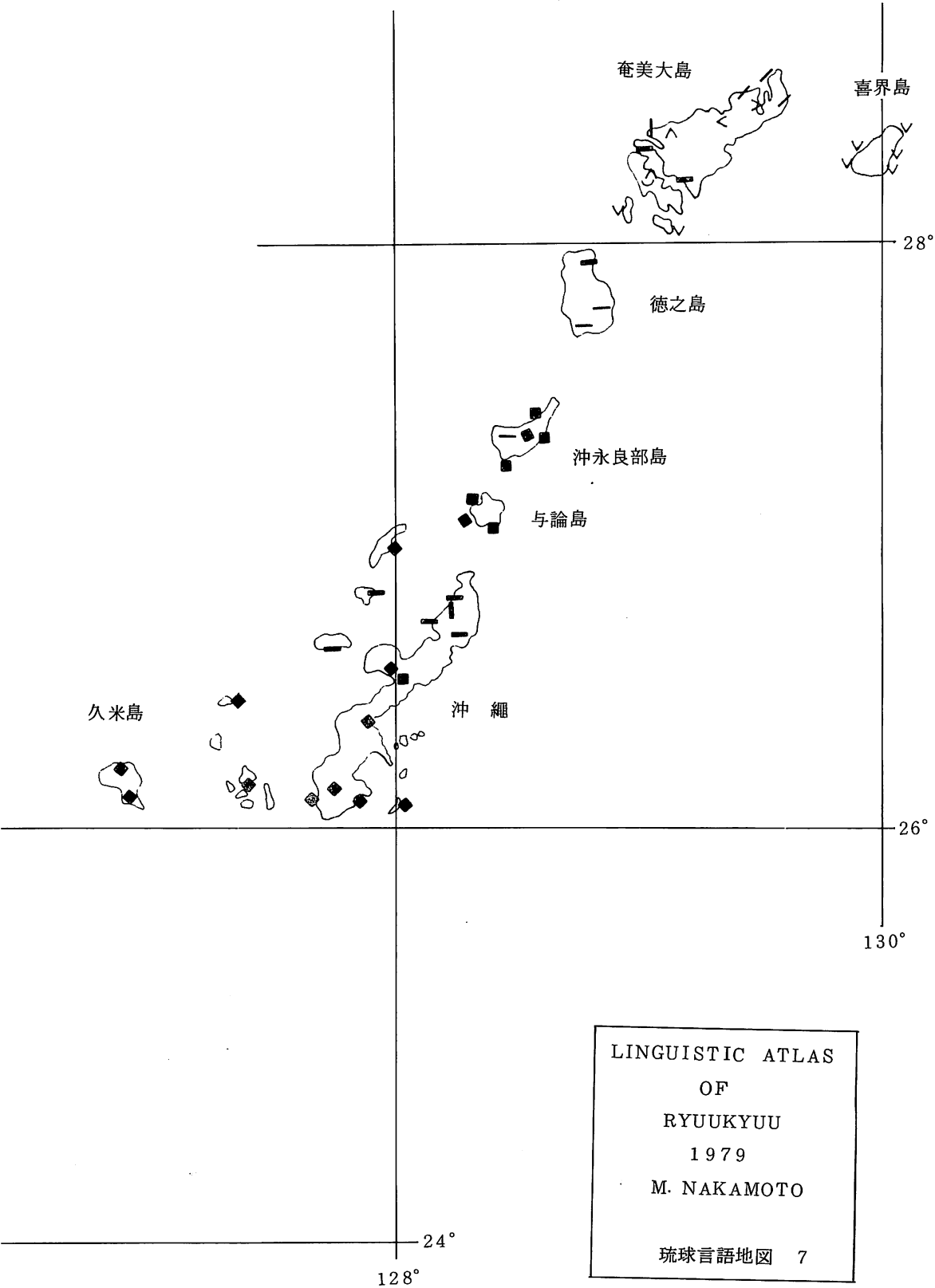
バカムヌ系

- ▲ bakamunu(ḡakamunu)
- ▼ bahamunu(ḡahamunu) ▲ baxamunu
- ▣ bagamunu
- ▲ bagasa(ṛ)rumunu ▶ bagasanumun ◀ baganaṛ
- ▼ ḡakarumunu

ワカムヌ系

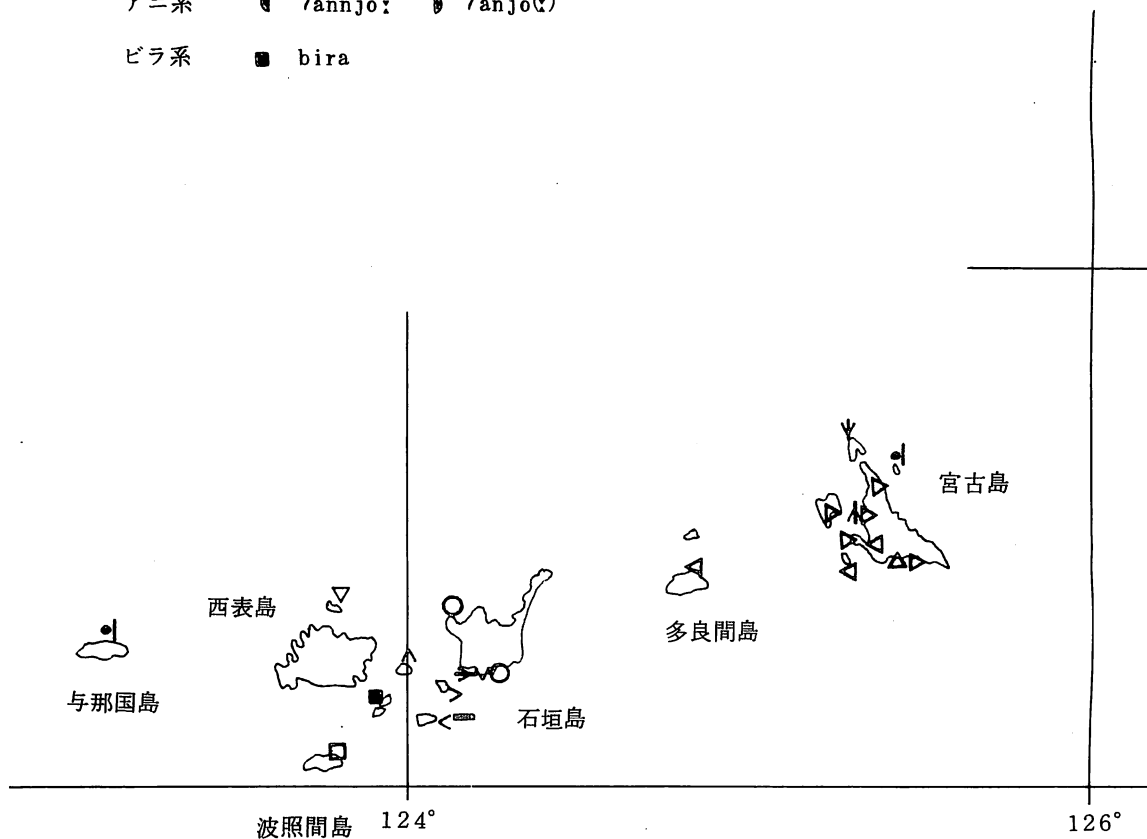
- wakamunu(ṛ) ◆ wakamun
- ▮ wahamunu ▬ wahamun | waṛmunu — waṛmun
- / waṛkammun
- ^ wahasammun ∇ waṛsammun < wasammun > wassammun
- wahasamun

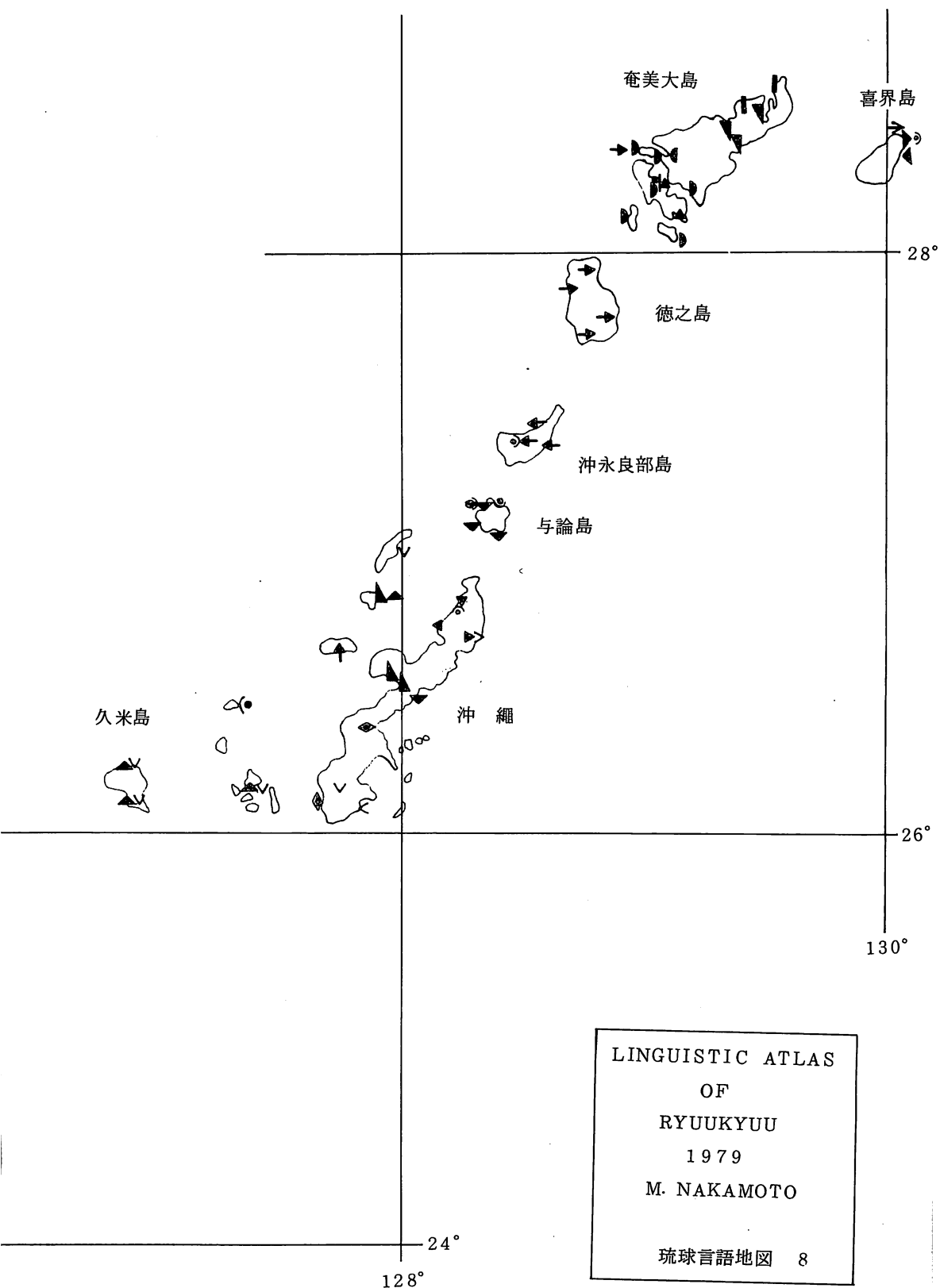




年 上 (兄)

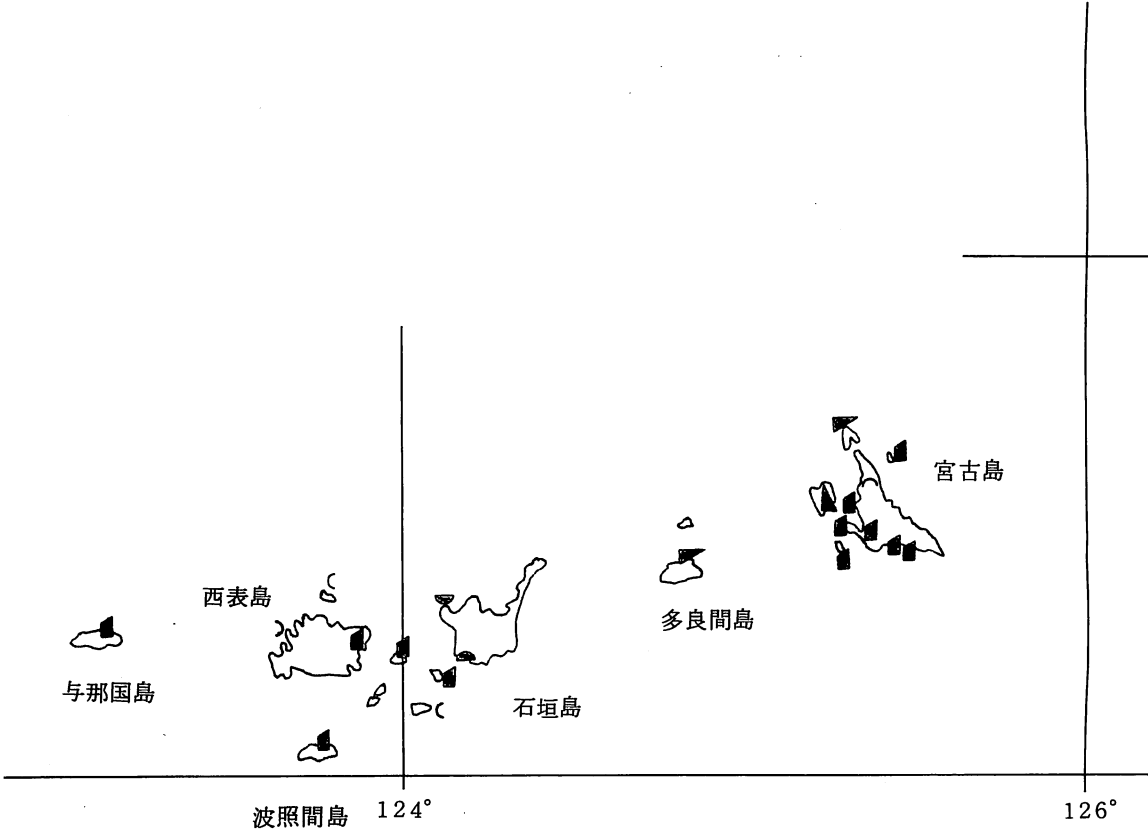
セザ系	— sez	sīdza		
	⊙ suda(?)	⋈ sudza	Ψ sudza	
	⊙ fida(?)	⊙ fi:da	⊙ fidabi	⊙ firahata
	➤ fidga(?)	∨ fi:dga	^ findga	< fidza > fi:dza
	○ çidga	□ Jama		
アザ系	△ ada	◁ adga	▷ adza	▽ a:dza
ヤクメ系	◀ jakkī:	▶ jakki:	▼ jaka(?)	▲ jattji:
	▼ jakumī	▲ jakumi:		
	▲ jammī:	▶ jammui	▼ ?amme:	◀ jammi:
	↑ m?:mi	➔ mī:	← mi:	
アッピ 系	◆ ?appi:	◆ ?aφi:		
アニ系	◆ ?annjo:	◆ ?anjo(?)		
ビラ系	■ bira			

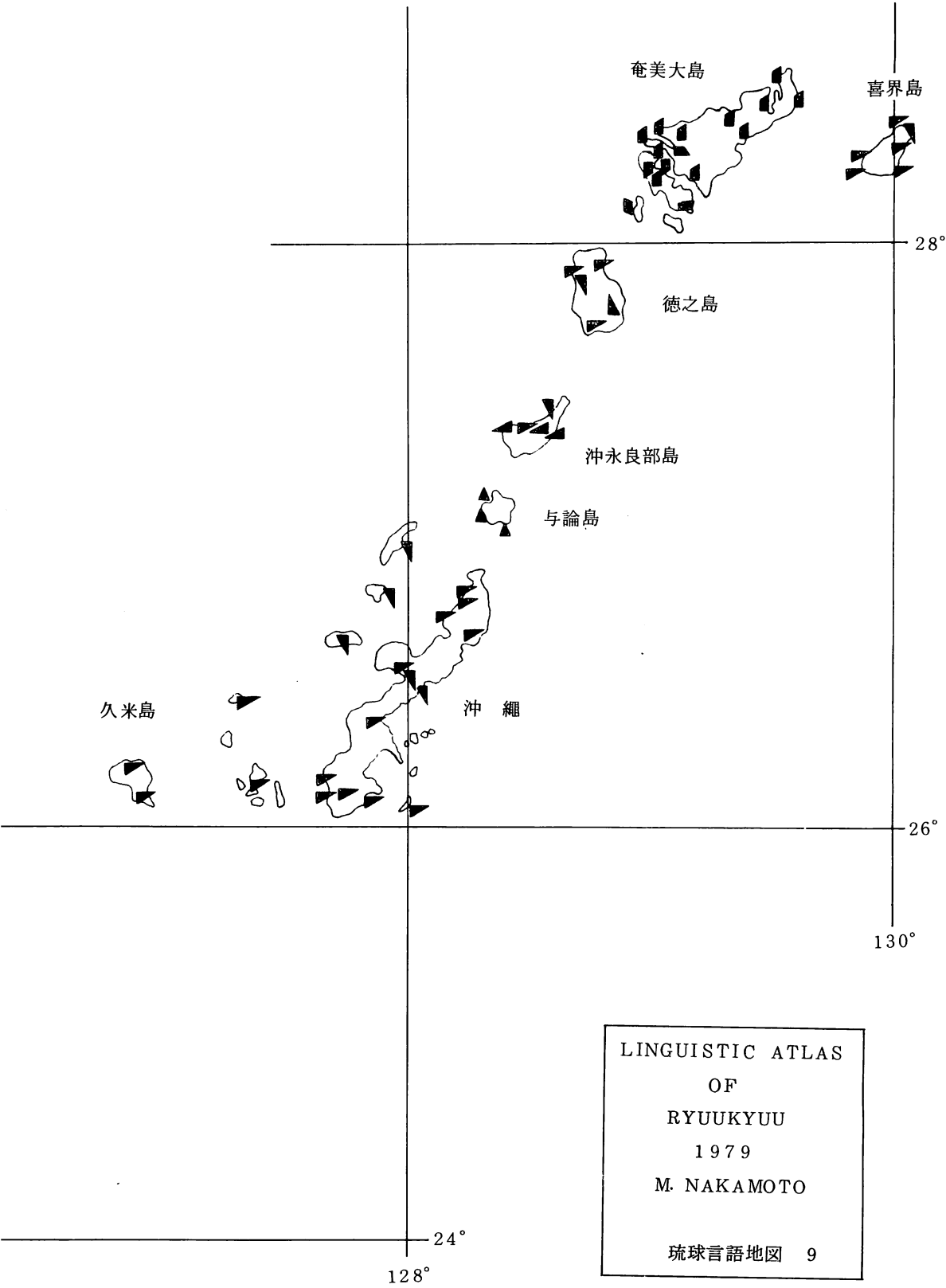




年 下 (弟)

オトト系	■ ʔututu	▤ ʔututu:	▥ ʔutu:tu
	▦ ʔuto:to:	▧ ʔutu:tu:	
オット系	▨ ʔuttu	▩ ʔuttu:	▪ ʔutu:
	▲ ʔuttubi		▫ utu
オチト系	◡ ʔutsi:tu	◢ ʔutʃitwa:	◣ ʔufitu
オトド系	◤ utudu	◥ ʔutudu	





友

- アグ系 ● ʔagu
- エージュ系 ! ʔe:ɖguɾ
- ドウシ系 ■ duʃi ▨ ruʃi
◆ duʃi, duɾʃ ◆ duɾʃi
▼ dusi, dusi
▲ dutʃi
- ホーハイ系 < porbɛɾ
- トモガラ系 < tumkara

